日刊 動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合
〒280 千葉市要町2番8号（動力車会館）
電話 （鉄電）千葉 2935・2936番
（公）千葉（22）7207番

91.6.13 No. 3409

NO! 戦争 「仕方ない」で子供たちを戦場に送れるか

「現実的であれ」の落し穴

今、自衛隊の海外派兵やPKOに反対するわれわれに、最も頻繁に向けられる非難は、「現実的でない」という言葉である。いわく、「自衛隊も現実に存在するものは認めるしかない」「国際貢献は現実の要請だ」「社会党も現実路線に転換せよ」「平和運動よりも現実の労働者の要求を」―こうした言葉が最近は自民党などからあびせられるだけでなく、「労働運動」の内部ですらおお流行だ。しかし、これこそ落し穴ではない、支配階級の意向に沿ったトリックではないのか。

「現実を直視しろ」などと言われるときはたいていい、多元的な動きは無視され、現実の一つの側面だけが強調される。戦争反対を唱え、労働運動の産業報国会化に反対し、自衛隊の派兵に反対し、等々の動きはすべて「非現実的」のらく印を押される。結局なんのことはない、支配階級の意向に沿った方向だけが「現実的」と言われるだけのことだ。

戦争反対の立場を選ぶのか、仕方ないという立場を選ぶのか、そのどちらもが「現実」の一面に他ならない。にもかかわらず、マスコミや、そして「労働組合」までもが、取り込まれてしまい、うんざりするような「現実論」をふりまいている。

どこまで続く「仕方ない」への屈伏

(1) 「現実」とは、本来、すでに与えられたものであると同時に、これから日々造られていくもののはずだ。しかし、「現実的であれ」と言われるとき、この国では、未来に向かって考えるのではなく、既成事実とイコールなのだ。現実的たれ、ということは、既成事実に屈伏せよと言うことに他ならない。「現実」がこのようにすでに与えられた過去においてだけとらえられるとき、それは簡単にあきらめに転化する。「現実だから仕方がない」というように、「現実」はいつも仕方のない過去なのだ。つまりすべてが「仕方のないこと」になるのである。仕方なしに戦争放棄した日本は仕方なしに再軍備し、今度は仕方なしに自衛隊を海外派兵へ・・・・いったいどこまで行ったらこの既成事実への屈伏からぬけだせるのだろうか。

支配階級が望ましい方向だけが「現実的」？

(2) 社会的現実とは、言うまでもなく、複雑であい矛盾したさまざまな動きによって造られている。しかし、労働組合は、何のために存在しているのかすら忘れ去られようとしている。我慢のならないような労働者の現実を打開し、労働者がほんとうに社会の主人公となるために、社会を変革するのが、労働組合の原点ではなかったのか。「現実だから仕方ない」というのなら、労働組合なんかもう必要ない。日教組委員長までが、「現実に自衛隊は存在するしほおっておくわけにはいかない」と言い、〝教え子を戦場に送るな！〟のスローガンも、もうやめようと言うのだ。国労だって同じである。「清算事業団の解雇は、たしかにひどいことだが、分割・民営化という現実の前には和解するしかない」と。現実、現実、現実・・・・と、無限に後退を繰り返しながら、ついに自衛隊派兵までいきついてしまった。われわれは、いつまでこんなことを続けるのだろうか。

ところで、凶暴な侵略戦争につき進んだ、当時の日本帝国政府の首脳どもは、「東京裁判」で次のように証言している。「私個人としては、この（日・独・伊）同盟に反対でありました。しかしながら、五相会議で非常に問題の研究が続けられまして、・・・・そこで現実の問題としてはこれを絶対に拒否することは困難だと思います」（木戸首相）「私の個人的意見は反対でありましたが、すべて物事にはなり行きがあります。・・・すなわち前に決まった政策が一旦既成事実になった以上は、これを変えることは甚だ簡単ではありません」（東郷外相）「私は反対しました。しかし・・・われわれ日本人の行き方として、自分の意見は意見、議論は議論といたしまして、国策がいやしくも決せられました以上、その国策に従って努力するというのがわれわれに課せられた従来の習慣であり、また尊重せらるる生き方であります」（小磯首相）・・・・

いったいこれはなんなのか！ これを聴くべき言葉を失う思いがする。上から下まですべてが、「仕方のない現実」におし流されたというのだ。結局二千万人のアジア民衆を殺りくしたのも、「仕方のない現実」だったというのだ。

しかし、今現実に進行していることはこれとどこが違うだろうか。われわれは、今また「仕方のない現実」としての戦争に突き進みはじめてしまったのである。

「仕方ない」というのなら労働組合は必要ない

西日本 13版△ (2)

社党若手議員

「現実路線」へ新組織

アクション・ニュー・デモクラシー

社会党に現実的対応求める

「戦争」について考える②

★6・23反戦闘争に向けて★